

現代短歌分類詩典

津

端

亨

編

纂

章

江苏工业学院图书馆藏

新裝判
40卷

現代短歌分類辞典

新装版 40 卷

通卷 1 9 8

平成六年六月二十日 発行 定価 一七、四〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345

埼玉県北葛郡杉戸町宮前一九六―五

電話（〇四八〇）三八―〇〇四〇番

振替 東京三―九三二一四

(ISBN 4 - 8 7 7 0 6 - 1 9 8 - 3)

次

目次	歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
なみ	四〇五	一	なみなみと〔なみなみと〕	二七	七五	一
なみ〔無み〕	二	二二	なみなみならぬ〔並並ならぬ〕	一	七六	一
なみいる〔並み居る〕	二	二二	なみのおと〔浪の音〕	二五	七六	九四
なみうちぎわ〔波打ち際〕	二	二二	なみのはな〔波の花〕	六	七九	四
なみうつ〔波打つ〕	二	二二	なみのり〔波乗り〕	三	七九	一
なみおと〔波音〕	三五	二二	なみはた〔列旗〕	二	七九	三〇
なみがしら〔波頭〕	一五	二三	なみのほ〔波の穂・波の秀〕	八八	八〇	二
なみかぜ〔波風〕	三八	一四	なみま〔波間〕	五八	八二	一
なみがた〔波形〕	二	一五	なみまくら〔波枕〕	三	八四	九
なみき〔並木〕	三〇七	一五	なみよけ〔波除け〕	二	八四	二〇七
なみじ〔波路・浪路〕	三五	二三	なみほ〔竝穂〕	一	八四	九九
なみする〔無みする〕	六	二四	なみよろふ〔竝具〕	一	八四	四
なみだ〔涙〕	一六七八	二五	なよる〔馴寄る〕	一	八四	六一
なみだあめ〔涙雨〕	一	七〇	なむ〔並〕	二	八四	四
なみだがは〔涙川〕	一	七〇	なむ	二	八四	一
なみだぐましい〔涙ぐましい〕	六	七〇	なむ	三	八四	九
なみだぐむ〔涙ぐむ〕	五二	七〇	なむあみだ〔南無阿弥陀〕	七	八五	一
なみだごえ〔涙声〕	三	七一	なむあみだぶつ〔南無阿弥陀仏〕	二	八五	二
なみだする〔涙する〕	二三	七二	なむし〔菜虫〕	一	八六	二八五
なみだつ〔波立つ・浪立つ〕	六〇	七二	なむる	七	八六	一七三
なみだつく〔涙〕	一	七四	なめくじ〔蛞蝓〕	一三	八六	一
なみだーながら〔涙ながら〕	八	七四	なめこ〔滑子〕	一	八六	一八
なみだのつゆ〔涙の露〕	四	七四	なめしいわ〔滑岩〕	九	八七	一一
なみだもろい〔涙もろい・涙脆い〕	一	七四	なめす〔糝す〕	二	八七	一九
なみなみ〔並並〕	二二	七四	なめずる〔舐めずる〕	一	八七	三一

ならこうえん〔奈良公園〕	七二七	なりこまや〔成駒屋〕	二一六三	なれどり〔馴鳥〕	二二〇
ならじ	一一二七	なりたち〔成り立ち〕	一一六三	なれのはて〔成れの果て〕	二二二
ならし	四二七	なりたつ〔成り立つ〕	一一六三	なれば〔なれば〕	一八五二二
ならしの〔習志野〕	二〇二八	なりとも	四八一六四	なれ	一一二六
ならす〔均す〕	二二一八	なりのとだえ	一一六五	なれや	四二二六
ならす〔馴らす〕	一一一八	なりのまにまに	一一六五	なれる〔馴れる〕	三二二七
ならず〔鳴らす〕	一九四一九	なりびびく〔鳴り響く〕	二二一六五	なれる〔慣れる〕	一一二七
ならず〔ならず〕	三二二四	なりひらだけ〔業平竹〕	四一六六	なわ〔縄〕	一〇五二二七
ならで〔ならで〕	五五二二四	なりまさる〔成り増さる〕	一七一六六	なはしろ〔苗代〕	九〇三三〇
ならでは	六二二六	なりわい〔生業〕	一六四一六七	なはしろぐみ〔苗代菜萁〕	六二二二
ならない〔ならない〕	二二二六	なりわたる〔鳴り渡る〕	一四一七二	なはしろだ〔苗代田〕	一四二二二
ならなくに	二二二七	なる〔鳴る〕	七四五二二	なはしろみず〔苗代水〕	一一二二三
ならぬ	二二二七	なる〔生る〕	三一九二	なわすれなぐさ	一一二二三
ならのみやこ〔奈良の都〕	二二二四	なるかみ〔鳴る神〕	一一一九二	なわて	五四二二三
ならはし〔習〕	二二四一	なるこ〔鳴子〕	一一一九三	なわてじ	一一二三五
ならはら	二二四二	なるこ〔鳴子〕	一一一九三	なわとび〔縄跳び〕	一四二三五
ならぶ〔並ぶ〕	一一四二	なるこ〔鳴子〕	一一一九三	なわのれん〔縄暖簾〕	一一二三五
ならぶ〔列ぶ〕	二九九一四二	なるこ〔鳴子〕	一一一九三	なわばしこ〔縄梯子〕	一一二三五
ならぶ〔並べる〕	八一五〇	なるたき〔鳴滝〕	五一九三	なわばり〔縄張り〕	三二三五
ならやま〔奈良山〕	一六二一五〇	なると〔鳴門〕	七九一九四	なわめ〔縄目〕	一一二六
ならわかば〔櫓若葉〕	二二二五四	なるとうづしお〔鳴門渦潮〕	二一九六	なんい〔南緯〕	一一二六
ならわし〔習わし・慣わし〕	一八二五五	なるとかいきょう〔鳴門海峡〕	一一九六	なんおう〔南欧〕	五二二六
なり	六三二五五	なるびく〔ナルビク〕	一一九六	なんか〔南下〕	二二二六
なり	一四二五七	なるべく〔成る可く〕	四一九六	なんか	二二二六
なり	六二五八	なるほど〔成る程〕	三一九六	なんか	三〇二二六
なり〔形〕	一一五八	なれ〔慣れ・馴れ〕	一〇四一九六	なんか	一五二二七
なり〔鳴り〕	一八三一五八	なれ〔汝〕	四二八二〇〇	なんか	二二二八
なりきん〔成金〕	一一六三	なれかし	一一二二	なんか	三二二八
なりけり	三二六三	なれども	二八三二二	なんか	八二二八

なんき〔南紀〕	六二三八	なんぞ〔何んぞ〕	二三二四六	なんによ〔男女〕	二三二六九
なんきゅう〔難球〕	一一三八	なんたいさん〔男体山〕	二九二五二	なんねい〔南寧〕	二二七二
なんきよく〔南極〕	一二三三九	なんだか	七二五三	なんのきなしに〔何んの気なしに〕	一一七二
なんきよくかい〔南極海〕	一一三九	なんたる〔何んたる〕	二二五三	なんのその〔何んのその〕	二二七二
なんきん〔南京〕	六三二三九	なんたん〔南端〕	四二五三	なんば〔難破〕	六二七二
なんきんじょう〔南京城〕	九二四一	なんちゅう〔南中〕	四二五三	なんばありんぐ〔ナンバーリング〕	一一七三
なんきんこざくら〔南京小桜〕	一二四一	なんちよう〔南朝〕	三二五四	なんばせん〔難破船〕	三二七三
なんきんじょう〔南京錠〕	二二四一	なんて〔何んて〕	一九二五四	なんばん〔南蛮〕	二五二七三
なんきんだま〔南京玉〕	三二四二	なんで〔何んで〕	六二五五	なんばんせん〔南蛮船〕	二二七四
なんきんまめ〔南京豆〕	九二四二	なんてい〔南庭〕	八二五五	なんばんとり〔南蛮寺〕	一一七四
なんきんはぜ〔南京黄蘗〕	三二四二	なんでも	一六二五五	なんばんきせる〔南蛮煙管〕	一一七四
なんきんむし〔南京虫〕	六二四二	なんでもない〔何ーでもーない〕	一一五六	なんびと〔何ん人〕	一九二七四
なんこ〔ナンコ〕	一一四三	なんてん〔南天〕	一四七二五六	なんびょう〔難病〕	一一七四
なんこく〔南国〕	四二四三	なんといふ〔何といふ〕	七九二六〇	なんびょうよう〔南氷洋〕	二二七五
なんこつ〔軟骨〕	四二四四	なんど〔納戸〕	九二六二	なんぶ〔南部〕	八二七五
なんさん〔難産〕	一一四四	なんど〔何度〕	七二六二	なんぶう〔軟風〕	一一七五
なんさん〔南山〕	一三二四四	なんとう〔南東〕	二二六二	なんべい〔南米〕	六二七五
なんじゃく〔軟弱〕	一一四四	なんとう〔南島〕	一一六二	なんべいさん〔南米産〕	二二七五
なんじゅう〔難渋〕	五二四四	なんとしても	一一六三	なんぼう〔南方〕	三二七五
なんじゃもんじゃ	三二四四	なんとなく〔何んとなく〕	一〇二六三	なんぼく〔南北〕	一七二七六
なんしゅうじ〔南宗寺〕	二二四五	なんとあれば〔何んとあれば〕	一一六五	なんぼくちよう〔南北朝〕	二二七七
なんしょ〔難所〕	二二四五	なんーとーはーなしーに	一七二六六	なんみん〔難民〕	一四二七七
なんずる〔難ずる〕	一二四五	なんともしへぬ	二九二六六	なんめい〔南溟〕	七二七七
なんすれぞ	一二四五	なんなく〔難なく〕	一一六七	なんめん〔南面〕	六二七八
なんせい〔南西〕	二二四五	なんなりと〔何んなりと〕	二二六七	なんやう〔南洋〕	二〇二七八
なんせん〔難船〕	一一四五	なんなんとする〔垂んとする〕	一一六七	なんら〔何ん等〕	一〇二七八
なんぜんじ〔南禅寺〕	七二四五	なんにも	三五二六七		二二七九
なんせんす〔ナンセンス〕	一二四六				

なんろ〔難路〕	一 二七九	にえたぎる〔煮え滾る〕	一 二九七	にけむ	三 三〇五
に〔格助詞〕	三 二七九	にえたつ〔煮え立つ〕	四 二九七	にこりにこり	一 三〇六
に〔終助詞〕	二四 二七九	にえる〔煮える〕	一 二九八	におわし〔匂わし〕	一 三〇六
に〔接続助詞〕	八 二八〇	におい〔匂い〕	二 二九八	にかい〔二階〕	二〇四 三〇六
に〔荷〕	二三五 二八〇	においすみれ〔匂いすみれ〕	四 二九九	にかい〔苦い〕	四 三二二
にあげ〔荷揚げ〕	五 二八七	においなすな〔匂いなすな〕	一 二九九	にかいや〔二階屋〕	二 三二二
にあし〔荷足〕	五 二八七	におへる〔匂い〕	二 二九九	にがうり〔苦瓜〕	二 三二二
にいがた〔新潟〕	三五 二八七	においば〔匂葉〕	一 二九九	にがお〔似顔〕	二 三二二
にいぐさ〔新草〕	一七 二八八	においやか〔匂ひやか〕	一 二九九	にがおえ〔似顔絵〕	七 三二二
にいさん〔兄さん〕	八 二八九	においアラセイトウ	二 二九九	にかかい〔二科会〕	一 三二二
にいしほり〔新搾〕	二 二八九	においだつ〔匂立〕	二 二九九	にがき〔苦き〕	三八 三二三
にいしま〔新島〕	八 二八九	におう〔仁主〕	二八 二九九	にがす〔逃がす〕	一 三二四
にいす〔二ス〕	一 二八九	におう〔匂う〕	一六 三〇〇	にがつ〔二月〕	六〇 三二四
にいたかやま〔新高山〕	七 二九〇	におうもん〔仁王門〕	九 三〇一	にがつどう〔二月堂〕	一五 三二五
にひだたみ〔新畳〕	二 二九〇	におどり〔鳴鳥〕	二八 三〇一	にがて〔苦手〕	二 三二六
にいちえ〔二一チエ〕	一八 二九〇	におどりの〔鳴鳥〕	一 三〇二	にがな〔苦菜〕	七 三二六
にいつ〔新津〕	二 二九一	におのうきす〔鳴浮巢〕	一 三〇二	にがにがしい〔苦苦しい〕	一 三二六
にいづま〔新妻〕	四一 二九一	におやか〔匂やか〕	六四 三〇二	にがみ〔苦味〕	一〇 三二六
にいなめさい〔新嘗祭〕	一 二九二	にか	三 三〇四	にがむし〔苦虫〕	三 三二六
にいは〔新葉〕	五一 二九二	にがたけ	一 三〇四	にがよもぎ〔苦蓬・苦艾〕	一 三二七
にいはり〔新治・新壠〕	四九 二九三	にがな	五 三〇四	にがり〔苦汁・苦塩〕	五 三二七
にいはりた〔新壠田〕	一九 二九五	にがし	四 三〇四	にがる〔苦る〕	一 三二七
にいほし〔新星〕	五 二九五	にき	三 三〇五	にかわ〔膠〕	七 三二七
にいぼん〔新盆〕	八 二九五	にぎにぎし	一 三〇五	にきさく〔二期作〕	一 三二七
にいむろ〔新室〕	二九 二九六	にぎはし	二 三〇五	にきてき〔二義的〕	一 三二七
にうま〔荷馬〕	一七 二九六	にぎぶ	二 三〇五	にきにぎし〔賑賑し〕	一 三二七
にえ〔牲・贅〕	一三 二九七	にくからなくに	一 三〇五	にぎぶ〔和ぶ〕	二 三二八
にえかえる〔煮え返る〕	二 二九七	にけり	八 三〇五	にぎやか〔賑やか〕	五七 三二八

にぎやかさ〔賑やかさ〕	四三〇	にくたいてき〔肉体的〕	一三四二	にこり〔煮凝り〕	三三四
にぎり〔握り〕	五三三〇	にくだん〔肉弾〕	四三四二	にこす〔濁す〕	一四三五四
にぎりこぶし〔握り拳〕	三三二一	にくづき〔肉付き〕	一三四二	にこちん〔ニコチン〕	二三五五
にぎりずし〔握り鮓〕	一三三二	にくにくしい〔憎憎しい〕	一三四二	にこにこ〔にこにこ〕	二〇三五五
にぎりめし〔握り飯〕	一七三三	にくにくしさ〔憎憎しさ〕	一三四二	にこにこがお〔にこにこ顔〕	二三五五
にぎる〔握る〕	五三三二	にくはく〔肉薄・肉迫〕	四三四二	にこみ〔煮込み〕	四三五六
にぎわい〔賑わい〕	一三三四	にくぶと〔肉太〕	一六三四三	にこやか〔柔やか〕	六一三五六
にぎわう〔賑わう〕	五八三四	にくへん〔肉片〕	二三四三	にこよん	一三五八
にぎわし〔賑わし〕	四五三六	にくまれ〔憎まれ〕	三三四三	にこらす〔濁らす〕	五三五八
にく〔肉〕	一五一三七	にくまれぐち〔憎まれ口〕	六三四四	にこり〔濁り〕	二三八三五八
にくあつ〔肉厚〕	一七三三一	にくまれる〔憎まれる〕	一三四四	にこりさけ〔濁り酒〕	六三六四
にくい〔難い〕	六三三二	にくまんじゅう〔肉饅頭〕	二三四四	にこりなみ〔濁り波〕	二七三六四
にくい〔憎い〕	四三三二	にくむ〔憎む〕	一八一三四四	にこる〔濁る〕	一二九三六五
にくいろ〔肉色〕	五三三二	にくむべき〔憎むべき〕	一八三五〇	にさん〔二三〕	四三六九
にくうす〔肉薄〕	一三三二	にくや〔肉屋〕	三三五〇	にし〔西〕	二二二三六九
にくからず〔憎からず〕	一〇三三三	にくらしい〔憎らしい〕	五三五一	にしかぜ〔西〕	五三七四
にくからなく〔憎からなくに〕	二八三三三	にくるい〔肉類〕	二三五二	にしあかり〔西明〕	一三七五
にくがん〔肉眼〕	八三四四	にくるま〔荷車〕	五八三五一	にしがたのきだ〔螺形階〕	一三七五
にくさ〔憎さ〕	一四三四四	にくろ〔ニグロ〕	二三五二	にじます〔虹鱒〕	一三七五
にくさげ〔憎さげ〕	三三四四	にげあし〔逃げ足〕	三三五二	にしのきょう〔西の京〕	二三七五
にくしみ〔憎しみ〕	八一三四四	にげごし〔逃げ腰〕	一三五三	にじむ	一三七五
にくしゅ〔肉腫〕	一三三七	にげこむ〔逃げ込む〕	一三五三	にぞ	二三七五
にくじゅう〔肉汁〕	三三七七	にげだす〔逃げ出す〕	二三五三	にちりん	三三七五
にくしょく〔肉食〕	八三七七	にげば〔逃げ場〕	一三五三	にたり	一三七五
にくしん〔肉親〕	四二三七七	にげみず〔逃げ水〕	一三五三	につちう	一三七五
にくせい〔肉声〕	七三三九	にげる〔逃げる〕	一三五三	につらふ	一三七六
にくそん〔ニクソン〕	二三三九	にごう〔二号〕	二三五四	にし	一三七六
にくたい〔肉体〕	九七三三九	にこげ〔和毛〕	九三五四	にじ〔虹〕	五三一三七六

にじいろ〔虹色〕	一二 三九〇	にじゅううつし〔二重写し〕	一四一〇	にちれん〔日蓮〕	三九 四二八
にじかい〔二次会〕	二 三九〇	にじゅうばし〔二重橋〕	一三 四二〇	にちれんしゅう〔日蓮宗〕	一 四二九
にしかぜ〔西風〕	七七 三九〇	にじゅうまど〔二重窓〕	二四 四二〇	にちれんだいぼさつ〔日蓮大菩薩〕	二 四二九
にしがわ〔西側〕	六 三九三	にじゅうよじかん〔二十四時間〕	一四 四二〇	にちろく〔日録〕	一 四二九
にしき〔錦〕	七一 三九三	にじょうじょう〔二條城・二条城〕	八四 四二〇	にちろせんそう〔日露戦争〕	一一 四二九
にしきえ〔錦絵〕	二三 三九五	にしる〔煮汁〕	三 四二一	にっか〔日課〕	一八 四三〇
にしきがうら〔錦が浦〕	二 三九五	にしん〔鯀・鯢〕	五六 四二一	にっか〔日華〕	二 四三〇
にしきぎ〔錦木〕	一二 三九五	にせあかしや	一四 四二一	にっかい〔肉塊〕	四 四三〇
にしきごい〔錦鯉〕	七 三九六	にっこうきすげ〔日光黄菅〕	三四 四二二	にっかひょう〔日課表〕	一 四三〇
にしきとり〔錦鳥〕	七 三九六	にせい〔二世〕	一〇 四二三	にっかもん〔日華門〕	二 四三一
にしきへび〔錦蛇〕	一 三九六	にせもの〔偽物・贋物〕	四四 四二三	にっかん〔日刊〕	一 四三一
にしきまんさく〔錦満作〕	一 三九六	にせんり〔二千里〕	二四 四二三	にっかん〔日韓〕	四 四三一
にじっせいき〔二十世紀〕	四 三九六	にそう〔尼僧〕	二八 四二三	にっかん〔肉感〕	二 四三一
にして	二 三九七	にそんいん〔二尊院〕	三四 四二四	にっかんしんぶん〔日刊新聞〕	二 四三一
にして	五 三九七	にだ〔荷駄〕	四四 四二四	にっき〔日記〕	一五五 四三一
にしじん〔西陣〕	三 三九七	にだい〔荷台〕	二四 四二四	にっきちょう〔日記帳〕	七 四三六
にしのきょう〔西の京〕	二五 三九七	にたつ〔煮立つ〕	六四 四二四	にっきゅう〔日給〕	四 四三六
にしのまつばら〔西の松原〕	一 三九八	にたりと	二四 四二五	にっくねいむ〔ニックネーム〕	二 四三六
にじのまつばら〔虹の松原〕	三 三九八	にちげつ〔日月〕	二八 四二五	にづくり〔荷造り〕	一〇 四三六
にしのまる〔西の丸〕	二 三九八	にちげん〔日限〕	一四 四二六	にっけい〔日系〕	七 四三六
にじのわ〔虹の輪〕	一九 三九八	にちじょう〔日常〕	二六 四二六	にっけい〔肉桂〕	七 四三七
にしび〔西日〕	一九五 三九九	にちじょうさはん〔日常茶飯〕	二四 四二六	にっけい〔日計〕	一 四三七
にしびさす〔西日差す〕	二二 四〇四	にちなん〔日南〕	五四 四二七	にっけいぼ〔日計簿〕	一 四三七
にしほんぐわんじ〔西本願寺〕	二 四〇四	にちぼつ〔日没〕	四二 四二七	にっける〔ニッケル〕	三 四三七
にじます〔虹鱗〕	三三 四〇五	にちや〔日夜〕	二二 四二八	にっこう〔日光〕	三九七 四三七
にじみでる〔しみ出る〕	二 四〇六	にちよう〔日曜〕	一三〇 四二九	にっこうかいだう〔日光街道〕	一 四四八
にじむ〔滲む〕	一二〇 四〇六	にちようだいぐ〔日曜大工〕	一 四二五	にっこうきすげ〔日光きすげ〕	七 四四八
にじゅう〔二重〕	二二 四〇九	にちりん〔日輪〕	一〇六 四二五	にっこうすぎなみき〔日光杉並木〕	一 四四八

なみ【名詞】〔続き〕

波の面をとほくゆきたる彼の千鳥げにはるかにも光りたるかも④	菊池 知勇
波のかげより顔をいだせる海女のあり、眼もあをあとと口笛を吹く⑥	若山 牧水
波退きしあとの渚の鏡面に穂を映しつつ次ぐ波は寄る②	田谷 鋭
波の起伏大ゆれにゆれてわが佇てる堤防のさながら流さるるごとし①	荒木 暢夫
波の来るしばしの間耕してすべりひゆの朱の茎のこりたり	土屋 文明
波のごとうねり生ひたる青苔は樹の間を縫へりひくき庭池	渡辺 周一
(雲に翔ぶ)	
波のごと白楊立ちぬ見るかぎり遠く青める森の海かな(夏より秋へ)	與謝野 晶子
波のごと竹叢うごく秋風の雨こそよけれ静けくもかな	萩 真
波の如又きこえる虫の音の死滅をいそぐいのちらの声⑤	近藤 芳美
(角川文庫)	
波のごとゆるる畳の上に居てなげくわれをば捨ててかへりぬ	與謝野 晶子
(春泥集)	
波の来ぬ大き巖にとりつきて伸びしはまぐり海桐鼻をおほふ③	松本 常太郎
波の秀の朝日かがやく宇治川を見つつ我が来るころたらひに⑩	釈 迢空
波の大遂にくつがへり弾みあがりひしめき寄する荒き潮騒②	木下 利玄
浪の散るいはほに立ちて魚を突く女人をここに見ればかなしも	橋本 徳寿
濤の中に撃ちおとしたる敵機の数二百超ゆると聞くに唾を呑む⑤	岡野 直七郎

波の中にもぐりかくれる海女のあとに泡立つ渦が見る見る消える③	金子 不泣
波の中に異質なる浮き沈みして漂流物なべて生活の象せり	島田 修二
(村野四郎)	
波の中に採りし蛤を浜の子は一つ一つおく石にならべて⑦	松村 英一
波の中に波の影してあやおりてかけ去りにけりかけ来りけり④	石樽 千亦
浪の音もやうやく遠く室戸みち歩めばすこし汗ばみにけり⑩	吉井 勇
浪の音よかなしく鳴りそ幾千年ひと思ひつつわれは生くべし	岡本 かの子
波の果に貧しきかげをひく歴史お吉の生も瑣事とは云へず③	久方 寿満子
波のひく汀散りばふ貝殻の水泡にひかり生けりとも見ゆ③	千代 国一
波の日照りの反射の岡に人ありて風に蓆を投げとばすなり	前田 夕暮
波の上に躍りあがり落つる海豚の群そこにもここにも飛沫をあげ	川田 順
つ③(現代短歌全集)	
波のへはいつしかくらくなりにけり夕日のかげを島にのこして⑤	樋口 一葉
波の上をかけらふ海豚専念なり頭そろへていかけらふ見ゆ③	川田 順
(現代短歌全集)	
波のぼる築石垣は雪浅しぬれ色なして崩るもあり⑦	松村 英一
波の間に水眼鏡入れてのぞき見るわたつみの底蒼く明るし①	高田 浪吉
波の間に降り込む雪の色呑みて玄海の灘今宵荒れたり②(角川文庫)	宮 柊二
波のまにまゆするる解人間は山なせる荷の上荷なりけり④	石樽 千亦
浪のまにま揺れるる船をうち囲み水風鳥は水擦りて飛ぶ④	高橋 希人
波の間を飛ぶ鳥見てかぜさしうみの上の空くもりひろる①	小泉 茅三

波の向ふにかすかに霞む島が見える、いま乗つて来た船が帰つて行く③

波のむたかよりかくよりまろびあひ悲しき音を立つる石かな

(間歩集)

浪のむたたゆたひうける磯千鳥立ち去りしあとの海のむなしさ②

浪の共ただよひあそぶ鴨群の浮御堂へと或は近づく⑬

濤のむた船は大きく傾くに灯火見つめてゐずまひなほす①

波の面をけぶりてはしる水しぶき眼には見えねど顔うちぬらす④

波の寄り音なくかへす岩窪に夕潮貝のくれなゐが揺る③

波の寄る巖の崎に立つ鷗アイヌの子等は跣足なりけり②

浪のよる岩屋は古りて湯の湧かず荒れたるままに釘を打ちあり⑦

浪のよるこごしき磯を岩根ふみ枇杷の青葉をくぐりつつ行く

波のよる高浜の道暑けれど草むら深くいまだ露あり③

波の寄る真黒き巖にひとり居て春のゆふべの暮れゆくを見る③

波のわをしづめて筏に近づけり核が巻きぬむ千余の膜を⑥

波は愛しく砂を濡らしてはかへる、私もいつか波の一ひらとなる③

波はくるふ水草つきし大岩をかがのみて吐きかがのみて吐き

(新万葉集一)

波激く荒れ狂ふらし異様な音甲板を揺りてとどろく②

波走るおもしろき朝の海の上曇りの空にかくる太陽⑧

波走る五百珠千珠けたずあらば緒にしじ貫きて吾うながけむ②

金子不泣

尾上柴舟

中沢庭柯

川田順

平福百穂

菊池知勇

松本常太郎

小田観螢

長谷川銀作

望月光

島木赤彦

若山牧水

榊富照子

金子不泣

石樽千亦

塚田青紀

高田浪吉

安江不空

浪はたゞどぶんどぶんと寄せてゐる何を考へてゐる俺はなんたらう③

波早くなりてみづうみの暮るとき赤きヨットは風に傾く⑧

波はろばろ山もはろばろ子の二人まつらむ方に雲ぞ流るる②

波光る木の間がくりに見はるかす朝の海に亡き人を呼ぶ②

波ひかる五月の港に わが船は、進みいらんと するにあらずや②

波光るしづけき湖を渡り来て今船揺るこの荒き風や⑦

波引きしあとに濡れたる青き藻を踏めばかなしき思ひ出の湧く①

波ひきし岩群の面追ひゆきてかけめぐる子の影岩間にすべる③

浪ひきてうしほ滴る磯鼻の岩づら黒く日にかがやくも

波ひきゆき濡れ光る砂はつぎて大きくくづれかかるをしろく映せり②

波ひくと見れば寄せ来て岩群のたちまちかくる真白き渦に

波ひだにあかき光は濊とこころうごきて朝うみにをり

波一つなき湖の上の朝がすみ着水場は見えつつ遠し⑩

波ひびく旅の枕にゆかりなき夢より醒めて寒き夜半かな(心の遠景)

浪見むと急げる行手暫くの朝日の空に塵もまはなく

波もなき安房の入江に突き出でて仁右衛門島はたひらく見ゆ①

波もなき海辺の砂にはが居れば空の黄ばみて春の月出づ④

波もなき隠岐の朝の海楼にゆくなりく聞く夕立の雨

波もなき湖の底にしいたるらし沈むこころの猶やすらけき②

矢代東村

松村英一

高田保馬

高田浪吉

土岐善麿

岡野直七郎

若林牧春

長沢美津

野沢柿葺

中河幹子

林圭子

生方たつゑ

松田常憲

與謝野晶子

若山牧水

三浦武

若山牧水

安藤流木

尾上柴舟

波もまた心上りて進むありなるに任せて従へるあり²⁷
 浪やうやくしづまりくれば見えしといふその島影のわが眼にもみ

ゆ¹⁵

波やがて沙に沁むなり溢れ来る涙を常に内に吞むごと¹³

浪ゆけば泡たつみたま奥ゆけば底どくみたまこのたりはや¹⁰

波ゆたにあそべり牟婁の磯にゐてたゆたふ命息づきにけり⁸

波ゆらぐ池のむかひの松山の木間にほひて春の月いづ^(常磐木)

浪よ来て此真砂路を洗ひ去れ物おもふ子が蹈みし跡なり^③^(新月)

浪よしばし寄する裳裾をうちひめよ吾いま闇に流さるる如し^①

^(現代短歌大系)

波よする熱き砂ふみボールをするを心ゆらぎて観るは何ぞも

波よする磯辺の松に朝日さし梢の雪の赤く光れり^(多磨四)

濤寄する城の上にて叫ぶらくTobe or not to he

that is question^⑥

波よする小さき岩に肩削ぎし容に海鷗一羽が侍てり

波寄する渚にたちて妻にいふ慰言をおもひかなしむ

波よする浜のみそのの釣殿は風もしめりてすずしかりけり^①

浪よ浪よ何としてしかく高よする浪はこたへずただに寄せけり^①

濤よりの反射か船室の朝日の揺るることよやはらかきことよ

浪を荒み船はかたむきひとごゑもせぬ甲板に富士を見て居る^⑪

浪を掠め燕の飛ぶを見て佇ちし君はたちまち居らずなりにき^⑮

波をきりてわが船ゆけば連なれるいかつり舟の灯はゆすれつつ^④

與謝野 晶子

土岐 善麿

與謝野 寛

安江 不空

釈 迢空

佐佐木 信綱

佐佐木 信綱

尾山 篤二郎

宇都野 研

森 永康之

岡野 直七郎

山田 百合子

門間 春雄

昭憲皇太后

矢代 東村

若山 牧水

若山 牧水

川田 順

石樽 千亦

波を透く黄色の光りあまねかる中にほそぼそ眼をあきにけり^①

^(現代短歌大系)

浪を高めすでに暈ひたる人多し黄鶴樓へ航く船の中^⑩

波をつき嵐のまにま乗り抜きし猛者なる船や今宵も安かれ^④

波をはなれ豊さかのぼる日の前に艦尾の旗はさと開けたり^④

波を吹く風に靡けど池殿の御棚の藤は房いまだ伸びず^(芳麿)

浪をまいてあたかも空に竜王のたけりくるふごとし雲くらく走る

浪を捲き雲よび起す竜の子はひそみかねつもその隠り沼に^⑧

波を巻きて進める船の後に曳く一條の水脈のかなた故郷^(碧潮)

波を潜る海豚は船の上より見ゆ落合の瀬の潮迅くなりて^⑩

浪をもて衣をつくれけがれなくあえかに今ぞ眼をつぶりてむ^⑤

なめらかに岩越ゆる波はらはらと乱れ散る波・見のおもしろき^①

名も知れぬ水鳥一つ波の面を流れてゆけりこれもおもしろ^④

縄はりて若布はしたる石渚千潮の波のちさくくづるる^②

南国の甘きバナナの熟るる夜か胸に波うつ灯のほひかな^②

日のあたる岬を彼方青海の波の上にみつつ総の国行くも^④

火のあらし焰の波の立ちし日も猶にこやかに君はましけむ^⑦

日の入りてうす暗くなる入海をゆく船の波白く見ゆるも^⑦

火のごとく嶺のおほ岩かがやきてあくる谷間に雲の波わく

^(新年御歌会始)

日の中に波の光るは一部にてふかき色なす湖のしづまる^①

日の名残ほのめく海の浪の上に影もとどめず黒の帆の来る^④

竹内 薫兵

川田 順

矢沢 孝子

石樽 千亦

尾上 柴舟

大井 広

安江 不空

岡崎 義恵

松村 英一

若山 牧水

福田 夕咲

菊池 知勇

藤田 とみ子

近藤 元

前田 夕暮

尾上 柴舟

長谷川 銀作

金子 元臣

松井 如流

石樽 千亦

日の匂ひむせぶばかりに波打ちて鹹水溜に堪へつつあり⑬(毎日歌壇)坂本孫一
 日の光あかるき安房の青き海寄せる波の限り知られず③大岡博
 日の光波の光のただ中に衣なくて立つはづかしさかな④尾上柴舟
 日昇りて白き光にしびれ行く湖上の波の見えわたるかな⑯與謝野晶子
 日の丸のみ旗の波に妻吾のつひの言葉は言はで別れし吉村節子

(支那事変前後)

日はあかくしぶきにぬれて波の上四五尺たかくただよひてゐる⑦

(現代短歌全集)

日はいまだ雲さむざむと波立たず穢身浄土の山のあかつき

日は暮れて波のみ白き海の上いま夕雲の湧きて重なる①

姫神のめづる滝つぽ波ゆらく蒼波が底に宮居ますかも

ひよるひよる松一つ傾ける離れ岩その離れ岩に波は集る⑤

ひらひらと鷺を飛ばせて浪かともうごく夏野は青あらしなり①

ひるがへる暴風雨の海の浪ならん呑まんとわれを追ひて来るは

ひるの海の光波わけ筏わけ真珠の島に舟着きにけり⑬

昼ふくる土用の湖の光り波ひかり揺りつつ嵐はつる③

昼靄の下に風ぎたる海ありてひらめく波は二ところのみ③

ほそき舟玖磨の荒瀬の上ゆきぬ浪破れずば舟の破れん⑬

秀だちくる波の崩れをためらはす風時の間のひびき高まる⑥

穂だちつつ寄せくる波をふたわけに輪をくづさる渦の大きさ⑤

北海の荒き夜波にもまれぬむ今朝たちゆきし若き旅人ら②

渤海は今は見え来て浪ひろし塩の山光るその岸の辺に⑤

前田夕暮

中河幹子

築地藤子

伊藤左千夫

植松寿樹

芥川徳郎

堀口大学

尾上柴舟

島木赤彦

山下陸奥

與謝野寛

鈴木康文

鈴木康文

中河幹子

川田順

仏立つ産湯の海に波もなし屋根のつつじの花も降る世や①

ほど近き浪の音にもまぎれずて何処か知らぬ松虫の鳴く③

穂に出でし高草の間にいちじくる波立つ海は見えてかがよふ

ほのじろむ波の光に心さめて海人も興亜の年祝ぎやまず⑦

ほのぼのと暮れゆく浪の彼方より愛のひとみをひらく島の灯①

ほのぼのと波の面より生れくる夏の光に身はつまれつ④

帆をあげて大きくねりの浪の上に働く人を寂しみ見るも

ポンド貨を切り下げし波は波を呼びたちまち恐怖の洪水となる②

眼かがやく野間の岬の浪のいろまど面にありて古へおもほゆ②

(のぼり路)

捲きかへす世界の波の中にわれら足履みひろげしつかと立たむ①

水へだて遠き岩鼻の波しろしいたく静けき沖の風景①

みそのふのみ池の水にみゆるかな浪しづかなる御代のすがたも

(新年御歌会始)

満ち潮の波のくづれは付める足もと近くよせて来にけり

みちしほの波をけたてて万代のこゑとともにすすむ大ふね②

路絶えて重須の崎の海に入る眺めもさびし波の高き日②(岩波文庫)

満ちてくる潮のふくらみ来る波も来る波もただよふ光り散らす

みちのくの十三湊吹く風に立つ波見れば旅はものうし

みちのくの末の松山知らねども君がまくらに波はこえめや①

湖が清き光の遊ぶべき波を設けて待ちし月かな②

湖の凍りしところと凍らざる境の波がいたくかがやく(毎日歌壇)

正岡子規

中原綾子

市川敦子

今井邦子

関戸信次

菊池知勇

山崎柏村

村野次郎

斎藤茂吉

尾上柴舟

上代皓三

正親町実徳

川端千枝

明治天皇

與謝野晶子

清水恒子

釈迢空

正岡子規

與謝野晶子

井上一彦

湖の冴えたる上にうち疊る樹海の波をおける寂しさ ^⑬	與謝野 晶子
みづうみの中の浅瀬のさざ波は昼さへ月のさすけしきかな ^⑬	與謝野 寛
満つ汐に磯はせばまり岩ぬらす足もとの波の光真蒼し	依田 秋圃
水上へ吹きあぐる疾風しらじらと波くだきていゆきけるかも	田村 飛鳥
湊船あさびらきする波の上にうつるもうすき明の月 ^①	明治 天皇
南風いたく吹く日は波を高め須磨の浦わに潮あみかねつ ^①	正岡 子規
南薩摩のはての岬に浪かぶる岩のいくつを心に留めつ(のほり路)	斎藤 茂吉
南吹き西吹きて浪の遠音さへ日ごとに変わり木槿咲き盛る	若山 牧水
南より吹く風いたみ波だてる海のへに M o k h a の白き町見ゆ ^⑤	斎藤 茂吉
見のかぎり、波なる浜をわびにけむ、あから頼の子も、祖となり	釈 迢空
つつ	
みはるかす近江のうみのうす疊るうらさみしもよ波の青きは ^①	富岡 冬野
みふね沈み一夜を波に漂ひしとふ兄いたましく打膽られぬ ^②	山田 百合子
み仏は裳裾の波に光りたもち幽かなれかも匂ふ金色 ^①	中村 正爾
三見浦の石浜の波に夜も昼も石鳴りつづき八月終る	小島 経彦
みみと川岸うつ波もなみならぬ御法のおと聞えこそすれ	福田 行誠
みめぐみの波をかつきてあまの子も年のほぎ言いひかはちらし	平田 三枝
(新年御歌会始)	
宮戸島 大鷹森へは 浪高し まなかひに見つつ よらで過ぎゆく ^③	下村 海南
見ゆる限り人影あらぬ気安さに素足を波に遊ばすしばし	渡辺 千代
見るかぎり波さへ立たず桃の花匂ふ小島もいまは遠しも	古泉 千樫

三輪が崎入江の波は夕やけて並松くらし日はくれむとす ^{②⑦} (玉琴)	石樽 千亦
見たたしの蘭草の畑をわたる風大洋のごと波なしそよぐ ^⑥	朝吹 磯子
見渡せば御松原のさみどりの波うち寄するばかりなるかも ^①	清水 比庵
見たたせば風に群立つ波の秀のさむざむしもよ疊れる沼に	橋田 東声
(地懐以後)	
日は閉ぢてねむるにもあらず朝明の風に波立つ青麻蚊帳に ^②	杉田 鶴子
最上川海に入らむと風をいたみうなじほの浪とまじはる音す	斎藤 茂吉
(白き山)	
最上川の大き支流の一つなる小国川の浪におもてをあらふ ^⑬	斎藤 茂吉
(白き山)	
藻刈舟いまだ帰らず湖いちめんいざよふ波はただに照り返す地懐	橋田 東声
もこもことまだ盛りあがるたづきなき波の胴腹に鴨は居るなり	北原 白秋
弄ぶ波を切り切り小艦らはよくこそ来つれ今日し御前に ^⑧	尾上 柴舟
元の船波に吞まれし級戸風いま爆風に船くだけ沈む ^⑨	尾山 篤二郎
もの音は今は聞えぬ夕川の瀬に立つ波の色のはげしさ ^④	釈 迢空
藻の草の白き干きて沙に付く渚を行けば波の寄りくる	三木 羅風
(トラビスト歌集)	
みもち葉の影をうつせる山のまの波なき湖や鴨浮きあそぶ	篠原 志都児
桃畑を庭としつづく海人が村冬枯れはてて浪ただきこゆ ^⑬	若山 牧水
もやふかき冬のあしたはうねりよる渚の浪のひかり寂かなる	大井 広
盛りあがり砕けちりたる海の波白きはまりて青青と冴ゆ ^⑤	相良 義重
盛り上りもりあがりくる波の列船をめがけてまじぐらに来る ^⑤	相良 義重

諸人の団扇の風に両国の波や立つらん舟ゆらく見ゆ①

正岡子規

門牌潭の水の落ちぐち岩を囓む波の白きが闇に光りぬ(新万葉集八)

村山勇

やうやくに今は晴るるか雲の海大浪うちて乱れたちたり①

大悟法利雄

八百日行く船路の果も蔽ふらむ空打つ浪の末の白雲(新年御歌会始)

武島羽衣

焼きがねの流るるなして昇る日のひかりとけゆく大海の波に①

金子元臣

灼くる砂に堪へて立ちゐる目にあふれ波きれぎれに白さを碎く③

長沢美津

やすみするときつはる風吹きにけり青うなばらの波もしづかに

坊城俊政

(新年御歌会始)

やすらかに今日も生きたりわが影を夕街なみの灯に踏み来てつ①

中村素堂

安らかに波をはなると見るいなや天がかりしてゆく日なるらむ⑨

太田水穂

やすらかに光収めし入海の夕昏れむとしてむらさきの波①

滝口英子

やすらけき年のはじめの今日とてやみいけのなみもしづけからら

三条実美

む(新年御歌会始)

八十浦のなみもはるかに響くらん国つみやこのとしの初風

富小路敬直

(新年御歌会始)

破け立つ濤のしぶきのさむざむし荒磯はとみに暮れはててけり①

鹿兒島壽藏

山かげの深き入江の波なきにうつり静まる夜半の月かな⑨

尾上柴舟

山がはに倒れたりける太樹々が浪をかぶるを見つつゆきけり⑨

斎藤茂吉

山峽の激ちの波のほの明りわれを呼ぶ人の声を聞けり

釈迢空

山川のきしはいはほは卵の花の浪の底にもなりにけるかな①

八田知紀

山川の早瀬の波のたちまちに橋うちわたすいくさ人かな②

明治天皇

山川の真白き波にまもられて船あてやかにとどまれるかな⑨

與謝野晶子

山ことごと奪ひ尽してのこりたる岩床白く波の蔽ひちる②(玉琴)

石樽千亦

山坂の崖の腹ゆく車のうへ目下は青き入海の波⑥

尾山篤二郎

山下の松原を越えて海の上まで月押し照れり遠き波の音

日比野友子

(新万葉集七)

山近く釣りつつあれば折ふしに波の上なる鷺のこゑ⑧

吉植庄亮

夕心さびしみいだきひとり立つ川原の石に浪よせくなり(豊原雲)

佐佐木信綱

夕寒く風吹き出でて岸辺にはどぶくさき波打ちよせ居るも①

森山汀川

夕されば浪うちこゆる荒磯の声のふし葉に秋風ぞ吹く①

正岡子規

夕潮時の風に吹かれててんぐさ採る娘等の足袋に浪は及べり①

山田百合子

夕潮に浪立ててくる白き蒸気船は橋をすぎてたちまち向きを換へ

堀内通孝

たり①

夕汐は今かみつらむこぎよせしいそべの舟に波あたるなり

昭憲皇太后

夕潮はさしつあらし今切や外浜の浪のもりあがる見ゆ①

野沢柿葺

夕しほのさしくるならし磯さきの岩根をこえて波のたつみゆ

明治天皇

夕しほや今みちくらはしま千鳥むれゐる岩に波ぞかかれる①

昭憲皇太后

悠然と浪にただよふただ一羽鷗一羽にまっはるうれひ①

奥川夢郎

夕近み渚の岩をめぐりつつ汐はしづかに波を揚げたる

尾上柴舟

夕月の光はいまだ立たなくに波のうねりの照りはいみじき①

鹿兒島壽藏

夕づく日淡路の島の磯なみの音のきこえずなるが寂しさ④

中村憲吉

夕づく日おちはてし海よる波のむらさきの秀をうちひらめかす

吉植庄亮

⑩

夕鳥の鳴く声きこゆ木曾川をくだる小船に浪立ちさわぐ(宿墨詠草)

岡麓

夕なづむ波のはたてにかき消えし山々は未だ眼底にあり	堀内雄平
夕波のなぎさ光れる妖しさに手をひたしつつ息づかししも①	伊藤嘉夫
夕波の流のむかふに咲きおもるあぢさゐの藍は陽をはづれたり②	藤田とみ子
夕波の映えておだしき磯回より黒姫山ぞふたたび見ゆる	依田秋圃
夕波のひかりうつれる磯のかげ手をひかれつつ来る患者あり①	大熊長次郎
夕波や片かげ暗きけ寒さにひとはこゑかけずいそぎ去りにし①	荒木暢夫
夕波をのりゆく船に牛ひとつ尾をふりをるは哀れなりけり	橋本武治
横腹に波けぶりつつ黒き船高く大きく近づきたる(虚像の鳩)	高安国世
寄する波くらきはたてにほのぼのと光りそめたり雲の棚引く①	御供平信
よする波白くあがり浜に行くゆとり覚えず松の間にゐし⑧	高田浪吉
寄する波にきえぬ雪かとみえつるは入江のあしのほわたなりけり	樋口一葉
④	
よする浪のとどろきの中にかへす浪のひびきぞきこゆ松の葉し	菊池庫郎
に②	
寄せかへす波平凡に磯洗ひ暮れそめてきて車は灯す④	相良義重
よせかへりかつくづれゆく磯鼻の波にや消えむおのがおもひは②	太田水穂
(現代短歌全集)	
よせかへり砕くる浪に朝日さして飛び散るしぶき七いろ映ゆる①	武島羽衣
寄せきたる波のかしらの巻き上げてみどりいやふかく澄みとほり	菊池知勇
たる②	
よせくるは敵か味方かしら波の浜べを遠く呐喊のこゑする	落合直文
よせくるはとこよの波かいつみてもありその松のおもがはりせぬ	遠藤二郎
(新年御歌会始)	

よせてかへす波のまにまにただよひて灯籠の灯はまこと美はしも	高橋城司
よせてくる浪に五体をまかせつつ浪の力をわれはうばへり②	市山盛雄
寄せて来る波にゆらゆら押さるるまま白いくらげはいびつに泳ぐ	清水恒子
よせてはかへす初秋の浪にうちつれてひと鯉ふることの切なりし	富田碎花
かな①	
寄せては返す浪にもいつかなぐさまずまた砂山を越えて帰りぬ①	奥川夢郎
寄せてひく浪のあとより現はるる磯の傾き大いなるかも④	半田良平
よつのうみさらにしづけき波の上になはやはらぐる春風ぞふく	高丘紀季
(新年御歌会始)	
よつのうみなみもしづかに春風のわたるけしきはのどかなりけり	細川常典
(新年御歌会始)	
世の中のいろいろなことわたくしは波の音のやうに強く生きるべし(児童萬葉集)	森岡妙子
世の波におされながされ幾千里しらず船出のそのかみのそら②	九條武子
世のなみにここの蚕もめでたきや日ならべて開かぬ離家の障子	臼井大翼
(私濁)	
世の波のここにも及べ夜は鎖してひとりし遊ぶよき書の中に②	杉田鶴子
世の濤の中に堪へがてによろめきてやがて奪はれむ汝とも思ふ	光岡良二
夜の浪は屋根をあらへり夜もすがら闇のひびきを聴きつつも寝む	吉井勇
(水荘記)	
夜はふけて行来の人もなぎさうつ波の音のみぞ夢に聞ゆる①	正岡子規
世はゆたになるをのうらのはるの風なみのすがたもたちかへて見	北小路随光
ゆ(新年御歌会始)	